

教員養成セミナー8月号
動画講義

12カ月完成
教職・一般教養
パワーアップノート

◆第11回◆教育時事①

問題行動等調査、
全国学力・学習状況調査、PISA

講師：本田 辰雄

テーマ1

平成30年度 児童生徒の問題行動・
不登校等生徒指導上の諸課題に関する
調査結果について

テーマ1

調査の概要

- 調査目的

児童生徒の問題行動等について、今後の生徒指導施策推進の参考とするため

- 調査内容

- (1) 暴力行為
- (2) いじめ
- (3) 出席停止
- (4) 小・中学校の長期欠席（不登校等）
- (5) 高等学校の長期欠席（不登校等）
- (6) 高等学校中途退学等
- (7) 自殺
- (8) 教育相談

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等 生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019年 10月)

○いじめの認知件数

学校種別のいじめの認知件数は、小学校**425,844件**(前年度317,121件)、中学校97,704件(前年度80,424件)、高等学校17,709件(前年度14,789件)、特別支援学校2,676件(前年度2,044件)。全体では、**543,933件**(前年度414,378件)であった。全校種で増加している。

➡単純に「いじめ行為」が増加したと捉えられるわけではなく、積極的な認知が進んだ結果であると考えられる。学年別では(1 **小学校2年生**)が最も多く、82,360件であった。

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等 生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019年 10月)

○いじめの発見のきっかけ

いじめの発見のきっかけは、「(2 アンケート調査) など**学校の取組**により発見」は**52.8%** (前年度52.8%) で最も多くなっている。「本人からの訴え」により発見されるのは**18.3%** (前年度18.0%) であった。「(3 **学級担任**) が発見」するのは**10.6%** (前年度11.1%) であった。

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等 生徒指導上の諸課題に関する調査」 (2019年10月)

○いじめの発見のきっかけ

いじめは、学校の教職員が発見するケースが大半である。
ただし、(3 学級担任)が自ら認知するのは10.6%に過ぎない。
(2 アンケート調査)など学校の取組により発見できた例が52.8%で最も多いため、効果的な具体策であることを必ず覚える。

・「本人からの訴え」や「当該児童生徒（本人）の保護者からの訴え」で発見できる例は少ないため、日ごろの信頼関係の構築等も必要である。

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019年10月)

○いじめの態様

・「冷やかしやからかい, 悪口や脅し文句, 嫌なことを言われる。」が最も多く, 62.7%であった。(4 **精神的ないじめ**) が圧倒的に多いことがわかる。また, 「パソコンや携帯電話等で, ひぼう・中傷や嫌なことをされる。」という項目は中学校8.3%, 高等学校19.1%となっている。上述した心理的, (4 **精神的ないじめ**) に比べると割合は低い, 見過ごしてはいけない。

いじめの定義には「児童生徒が行う**心理的**又は**物理的**な影響を与える行為 (**インターネットを通じて行われるものも含む。**)」 「(5 **心身の苦痛**) を感じているもの」という文言があることを知っておこう。

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019年10月)

○不登校児童生徒数(長期欠席者数)

小・中学校における長期欠席者数は、小学校84,033人(前年度72,518人)、中学校**156,006人**(前年度144,522人)であった。全体では、**240,039人**(前年度217,040人)である。

このうち、不登校児童生徒数は、小学校44,841人(前年度35,032人)、中学校**119,687人**(前年度108,999人)、小・中の合計で**164,528人**(前年度144,031人)であり、在籍者数に占める割合は小学校0.7%(前年度0.5%)、中学校3.6%(前年度3.2%)、全体では1.7%(前年度1.5%)であった。

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019年10月)

○不登校児童生徒数(長期欠席者数)

高等学校における長期欠席者数は、80,752人(前年度80,313人)である。このうち、不登校生徒数は52,723人(前年度49,643人)で、在籍者数に占める割合は1.6%(前年度1.5%)であった。

➡不登校児童生徒数は(1 中学校)が最も多くなっている。学年別にみると、(2 中学校3年生) (45,213人)が最多であった。中学校段階になると急激に増加するため、中1ギャップの影響があると考えられる。

テーマ1

不登校の定義

不登校の定義

「連続又は断続して年間**30日**以上欠席し、
『何らかの**心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景**により、児童生徒が**登校しないあるいはしたくともできない**状況にある（ただし、**病気や経済的な理由**によるものを除く）もの』」

テーマ1

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(2019年10月)

○不登校の要因

- 小・中学校の不登校の要因を「本人に係る要因」で見ると、
- ・ 「『不安』の傾向がある」では、「**家庭に係る状況** (31.3%)」, 「**いじめを除く友人関係をめぐる問題** (30.6%)」が多い。
 - ・ 「『無気力』の傾向がある」では、「**家庭に係る状況** (46.7%)」, 「**学業の不振** (32.3%)」が多い。
 - ・ 「『学校における人間関係』に課題を抱えている」では、「**いじめを除く友人関係をめぐる問題** (72.4%)」が突出している。
 - ・ 「『あそび・非行』の傾向がある」では、「**家庭に係る状況** (53.9%)」, 「**学業の不振** (27.1%)」が多い。

テーマ2

国内外の学力調査

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査

● 調査の目的

（1 **義務教育の機会均等**）とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や（2 **学習状況**）を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への（3 **教育指導**）の充実や（2 **学習状況**）の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な**検証改善サイクル**を確立する。

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査

- 主な調査対象

小学校6年生、中学校3年生

- 調査内容

教科に関する調査

小学校は（4 国語 ）、（5 算数 ）、中学校は（4 国語 ）、（6 数学 ）、（7 理科 ）。（7 理科 ）は3年に1度程度の実施で、平成31年度は未実施。

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査

出題内容

(a) 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい（8 知識・技能）等

(b) （8 知識・技能）等を実生活の様々な場面に（9 活用する力）や、様々な課題解決のための構想を立て実践し（10 評価・改善する力）等に関わる内容。 教科に関する調査では、上記(a)と(b)が一体的に問われる。

平均正答率

平成31年度から中学校に英語の調査が追加されたが、「話すこと」の平均正答率が（11 約3割）であり、課題となっている（英語も3年に1度程度の実施）。

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果等

○全国（国公私）の平均正答数・平均正答率

	小学校				中学校					
	国語		算数		国語		数学		英語 ^{※3}	(参考値) 英語 「話すこと」
平成 31 年度	9.0 /14問 64.0%		9.3 /14問 66.7%		7.3 /10問 73.2%		9.7 /16問 60.3%		11.9 /21問 56.5%	1.5 /5問 30.8%
(参考) 平成 30 年度	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B		
	8.5 /12問 70.9%	4.4 /8問 54.8%	8.9 /14問 63.7%	5.2 /10問 51.7%	24.4 /32問 76.4%	5.6 /9問 61.7%	24.0 /36問 66.6%	6.7 /14問 47.6%		

※中学校英語の調査結果は「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計を集計。学校のPC端末等を利用して実施した「話すこと」は、英語とは実施生徒数が異なるため、「参考値」として集計。

○国語の調査結果

小学校

- ・ 必要な情報を得るために、本や文章全体を概観して効果的に読むことはできている。
- ・ インタビューの場面で、相手の意図を捉えながら聞き、自分の理解を確認する質問をすることはできている。
- ・ 相手に分かりやすく（1 **情報を伝える**）ための記述の工夫を捉えたり、目的や意図に応じて（2 **自分の考え**）の理由を明確にし、まとめて書いたりすることに課題がある。
- ・ **漢字**（同音異義語）を文の中で正しく使うことに課題がある。

○国語の調査結果

中学校

- ・文章の構成や展開，表現の仕方について，根拠を明確にして（2 **自分の考え**）をもつことや，文章の展開に即して（3 **情報を整理**）し，内容を捉えることに課題がある。
- ・話合いの話題や方向を捉えることはできているが，それを踏まえて（2 **自分の考え**）をもつことに課題がある。
- ・自分が伝えたいことについて資料の中から根拠となる情報を取り出して正確に書くことはできているが，自分が伝えたいことの根拠として読み手に（4 **分かりやすい**）ように書くことに課題がある。

○算数 / 数学の調査結果

小学校

- ・台形について理解していることがうかがえる一方、図形の（5 **性質**）や（6 **構成要素**）に着目し、図形をずらしたり、回したり、裏返したりすることで、ほかの図形を構成することに課題がある。
- ・示された計算の仕方を解釈し、（7 **減法**）の場合を基に、（8 **除法**）に関して成り立つ（5 **性質**）を記述することに課題がある。

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果等

- (2) 示された計算の仕方を解釈し、除法に関して成り立つ性質を、「わられる数」「わる数」「商」の3つの言葉を使って書く問題

・わり算では、

(正答例)

わられる数とわる数に同じ数をかけても、わられる数とわる数を同じ数でわっても、商は変わりません。

このことを使うと、計算しやすいわり算の式で考えることができます。

正答率:31.3%

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果等

$$400 \div 25 = \square$$

$$\begin{array}{c} \downarrow \times 4 \\ \downarrow \times 4 \end{array}$$

$$1600 \div 100 = 16$$

変わらない

だから、 $400 \div 25$ の答えの \square は、16です。

$$90 \div 18 = \square$$

$$\begin{array}{c} \downarrow \div 9 \\ \downarrow \div 9 \end{array}$$

$$10 \div 2 = 5$$

変わらない

だから、 $90 \div 18$ の答えの \square は、5です。

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査

○算数 / 数学の調査結果

中学校

・証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解している。
結論が成り立つための前提を考え，新たな事柄を見いだし，説明することに課題がある。

・事象を（9 **数学的に解釈**）し，問題解決の方法を数学的に説明することに課題がある。

テーマ2

平成31年度全国学力・学習状況調査

○英語の調査結果

「聞くこと」「読むこと」

- ・話されたり書かれたりしている内容を聞き取ったり，読み取ったりすることは，おおむねできていると考えられる。
- ・理解した内容を踏まえ，目的・場面・状況に応じて，話し手や書き手の伝えたいことは何かを理解するなど，（10 **概要や要点を捉える**）ことに課題がある。

「話すこと」

- ・話すことについては，全体的に課題は多く，特に（11 **即興でやり取りする**）ことに課題がある。

テーマ2

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）

OPISA2018

正式名称：PISA（Programme for International Student Assessment）…生徒の学習到達度調査

目的：義務教育修了段階（（1 **15** ）歳）において、これまでに身に付けてきた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る。

テーマ2

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）

○PISA2018

内容：読解力，（2 数学的リテラシー），（3 科学的リテラシー）の3分野（3分野の中から重点的に調査する中心分野が設定されるが，**中心分野**は実施年によって変わる）。2018年調査では読解力を中心分野として調査された。あわせて，生徒質問調査，学校質問調査を実施。

対象：調査段階で（1 15）歳3カ月以上16歳2カ月以下の学校に通う生徒（日本では**高等学校1年生**が対象）。

調査実施年等：OECD（経済協力開発機構）が2000年から（4 3年）ごとに実施。

テーマ2

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）

OPISA2018における日本の結果概要

3分野

- ・（2 **数学的リテラシー**）及び（3 **科学的リテラシー**）は、引き続き世界トップレベル。安定的に世界トップレベルを維持しているとOECDが分析。
- ・読解力は、OECD平均より高得点のグループに位置するが、前回より平均得点・順位が統計的に**有意に低下**。長期トレンドとしては、統計的に有意な変化が見られない「（5 **平坦**）」タイプとOECDが分析。

テーマ2

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）

○PISA2018における日本の結果概要

読解力

- ・ 読解力の問題で、日本の生徒の正答率が比較的低かった問題には、テキストから情報を探し出す問題や、テキストの質と信ぴょう性を評価する問題などがあった。
- ・ 読解力の自由記述形式の問題において、（6 自分の考え）を他者に伝わるように根拠を示して説明することに、引き続き、課題がある。
- ・ 生徒質問調査から、日本の生徒は「（7 読書）は、大好きな趣味の一つだ」と答える生徒の割合が OECD 平均より高いなど、（7 読書）を肯定的にとらえる傾向がある。また、こうした生徒ほど読解力の得点が（8 高い）傾向にある。

テーマ2

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）

○PISA2018における日本の結果概要

- ・社会経済文化的背景の水準が（9 **低い**）生徒群ほど、習熟度レベルの（9 **低い**）生徒の割合が（10 **多い**）傾向は、他のOECD加盟国と同様に見られた。
- ・生徒のICTの活用状況については、日本は、学校の授業での利用時間が（11 **短い**）。また、学校外では多様な用途で利用しているものの、（12 **チャットやゲーム**）に偏っている傾向がある。

教員養成セミナー8月号
動画講義

12カ月完成
教職・一般教養
パワーアップノート

◆第11回◆教育時事①

問題行動等調査、
全国学力・学習状況調査、PISA

講師：本田 辰雄